

平成 22 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究 (B)
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19320063
 研究課題名 (和文) 文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言
 研究課題名 (英文) Pragmatic Functions and Syntactic Theory: In View of Japanese Main Clauses
 研究代表者
 長谷川 信子 (HASEGAWA NOBUKO)
 神田外語大学・言語科学研究科・教授
 研究者番号：20208490

研究成果の概要 (和文)：言語理論の問い(a)「人間言語の体系 (普遍文法) とはどのようなものか」に日本語に特徴的に表出する主文現象の考察から迫り、(b)「日本語とはどういう言語か」の問いも合わせて追求した。(a)の問いに対し、「統語と語用の接点 (CP 領域) の構造と機能」を明らかにし、(b)については、言語間のヴァリエーションを可能にし、日本語の特質を説明する統語操作の語用的機能との関わりに関する仮説を提示し検証した。

研究成果の概要 (英文)：This research project approaches to the fundamental question of linguistic theory (a) “What is human language (Universal Grammar, UG)?” from the detailed examination of Japanese main clause phenomena, which are known to exhibit peculiar characteristics, by which another question (b) “What kind of language is Japanese with respect to UG?” is pursued as well. For (a), we have clarified the function and structure of CP (the interface between syntax and pragmatics) and for (b), we have presented and verified our working hypotheses regarding syntactic structure and operations which account for what makes language variations possible and what brings about specific characteristics of Japanese.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2008 年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2009 年度	2,600,000	780,000	3,380,000
年度			
年度			
総計	8,000,000	2,400,000	10,400,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：統語構造、極小主義、CP 構造、モダリティ、語用的機能、カートグラフィー、文末表現、空主語

1. 研究開始当初の背景

統語理論研究は、60-70 年代の (拡大) 標準理論の体系を受け、記述的一般化が大いに進

み、80 年代の GB 理論で普遍文法および言語間の解明に向け、体系的にも研究手法的にも一定の確立がなされ飛躍的に発展した。しか

し、そうした中であって、日本語という言語は、理論体系とその構築においても、主流とはなり得ず、日本語を扱った生成文法研究者は、常に、次のような疑問を禁じ得なかった。

GB 理論を始めとした日本語を扱った統語理論研究が、未だ、「日本語とはどういう言語か？」という理論研究の醍醐味と言える洞察を提示するに至っていないのは何故か？

本研究は、この疑問に対し、以下の背景的認識により、研究を遂行した。

- (1) これまでの研究手法であった言語一般（殊に、英語を中心とした印欧語）から日本語を考察するのではなく、日本語に特徴的・固有と思われる（主文を中心とした）現象から、理論を構築し、そこから言語理論へ提言する方向を採用する。
- (2) 上記(1)については、幸い、生成文法は半世紀以上の言語研究により統語構造と操作の基盤が明らかになっていることから、日本語の現象からの理論構築が生成文法初期に比べ格段に容易になっており、これまでの理論研究や、国語学・日本語学における記述研究の成果も取り込みながら、理論構築を進めることが可能となっている。
- (3) 理論研究全体としても、GB 理論から極小主義へと移行し、様々な言語に対応可能な抽象性を深めてきている一方、個別言語の特性を導き出す具体的なメカニズムの必要性も増してきており、それが提示できる理論体系が待たれている。

本研究の上記の問題意識と方向は、そうした理論研究の変遷・発展のタイミングの観点からも、日本語の統語研究を理論的な枠組み内で位置づけ、さらなる発展を目指すためにも、重要な研究である。

2. 研究の目的

(1) **目的**：日本語に特徴的に見られる（しかし、これまでの理論では看過されてきた）現象を集中的に考察し、それらを取り込むことのできる理論の構築により、言語理論へ提言し、その理論の観点から、上記の「日本語とは如何なる言語か？」の問いに具体的な答えを提示することにより、それが可能となる理論構築へ、提言することにある。

より具体的には：

(2) **扱う現象と理論構築**：これまでの理論研究で「看過されてきた」現象、つまり、文の談話内や語用機能と関わる「主文現象」に焦点をあてる。日本語には、「主文」に文情報の基本である「命題」だけでなく、「発話・語用的機能」「話者の視点」「情報の重要性・新旧」に関する表示が豊かで、それらと関わ

り「省略」「語順変換」「文末の述語形態や終助詞」「主題や対比などを示す係り助詞の存在」など、様々な現象や要素が観察されることが知られている。しかし、それらは、（日本語特有な現象として）統語理論研究においては、「周辺的」な現象として、（黒田成幸氏の一連の研究など、少数を除いては）体系的に理論的視点に立って追求されることはなかったが、本研究では、これまでの理論研究の問いを「逆さ」にして、むしろ、そうした「周辺的」「日本語特有」と思われてきた現象を、統語理論構築においても「主流」「解決されるべき」現象と位置づけ、それらの集中的な考察から、理論構築への提言を行う。

(3) **理論と日本語統語研究**：上記(2)の目的と同時に、その理論から、日本語はどのような言語として位置づけられるかを、統語論で想定している言語一般に対応可能な構造とメカニズム、パラメーターのあり方の観点から、これまでの般化を捉え直し、新たな分析を提示する。日本語学と理論言語学の両面から、日本語に特有の現象に迫る。

(4) **分野への貢献**：本研究には、上記の研究課題を推進し、成果を発信することにより、広く「言語学」一般、殊に、統語論、語用意味論、及び「日本語学」「英語学」と関わる分野の活性化、分野間の交流、学生や若手研究者への言語研究への興味喚起、という、当該の研究課題以上の目標の遂行も狙う。

3. 研究の方法

上記「2. 研究の目的」に照らし、どのような研究の方法を採用したか、以下、番号に対応させて記述する。

(1) **目的**：その達成に向け、①本研究の現象面での核となる「主文現象」の理論的位置づけの確認、②理論体系・枠組みの吟味と改訂・構築の方向性の提示、③当該現象の理論的分析と理論への提言、を行った。（その成果については「4. 研究成果」を参照のこと）

(2) **扱う現象と理論構築**：多くの「主文特有現象」の中から、理論構築を大きく左右すると思われる現象（以下、①参照）を集中的に考察し、理論的には、近年 Luigi Rizzi などを中心にヨーロッパで追求されているカートグラフィー研究の知見を取り込む方向で研究を進めた。具体的には、

① 文の語用的機能と関わる文末の述語の形態（活用語尾やモダリティ）と連動して文中の要素に影響を与える現象の考察。例：（長谷川の担当現象）命令文、主語人称と述語形態の連動現象、主語の省略、話し手素性と聞き手素性（授受表現、主題）、判断文における主題と主語の核、提示文、条件節と主文の連動、などの現象；（遠藤の担当現象）終助詞の統語構造と機能、埋め込み文の形態と主

文との関係、など。

② GB 理論やそれ以前の理論では、むしろ、文の語用的機能を排除する形で理論構築がなされてきたことを確認し、語用的機能の統語的表出部としての CP を理論体系の観点から位置づけている Rizzi (1997) の観点から上記①の現象を考察。それに伴い、2009 年度よりカートグラフィー関連研究を推進すべく遠藤喜雄が分担者として参画。

(3) **理論と日本語統語研究**: 欧米でのカートグラフィー研究は主に文頭 (左端部) の構造から、理論体系を吟味、発展させているが、日本語ではむしろ文末 (右端部) にその特徴が見られることから、それらを司る CP の構造と機能・役割および統語操作に焦点をあて、むしろ、日本語の現象の分析を基盤にした統語構造・操作から理論構築へ提言した。

(4) **分野への貢献**: 本研究の研究組織 (研究代表者 1 名と (2009 年度から) 分担者 1 名) は小さいが、課題の成果だけでなく、この研究の指し示す方向性が言語研究において生産的であることを国内外に示すため、研究内容や興味を共有する多くの研究協力者を擁した裾野の広い研究体制を構築し、各年度毎に 2 回以上、国内外から研究者を集めた比較的大規模の「国際ワークショップ」を開催し、また、国内の学会でのシンポジウムの・企画開催、海外の学会や大学での講演を、学会での研究成果発表に平行して精力的に行った。

4. 研究成果

以下では、上記「目的」に照らし、(1)理論構築、理論体系への提言；(2)日本語の主文現象の具体的な分析と成果、およびそれらの理論的位置づけ；(3) 成果発表の方法と研究活動全体の方針における貢献、の観点から記述する。(以下の記述では、適宜「5. 主な発表論文等」にリストした [雑誌論文]・[図書] に言及しているので、参照されたい。)

(1) **理論構築に向けて**: 以下の図は、生成文法における統語論の研究領域である。

言語理論の領域 (右端は対応する意味論領域)

A	Lexicon 語彙情報、述語アスペクト、語形成、など	語彙 意味 論
B	述語の項構造 vP ----- (D 構造) 句構造理論 Syntax [命題の構造] 移動現象、 (S 構造・Spell out) 格	論理 学 述語論 理
	LF (論理形式) 作用域、Wh 句 CP	命題論 理
C	発話・語用的機能 文タイプ (断定、質問、命令、提示)；情報構造、視点	語用 論

本研究の課題と密接に関わる主文現象は、上記の言語理論領域の観点からは [B] と [C] の接点に関わる現象である。本研究の最大の成果は、[C] 領域と関わる統語現象を豊富に有する日本語を考察することで、これまでの [B] を中心に構築されてきた理論では到達できない「言語の機能と構造についての一般化・体系」が得られ、それを理論化したことである。

統語理論の変遷を振り返ると、過去半世紀以上にわたり最も生産的に行われきたのは、[B] の「命題としての文の構造」の領域である。理論の中心を担ってきた欧米諸語の現象は、その観点から多くの知見を提示しており、日本語の分析においても、そうした [B] 領域との関連で得られたものが、日本語の統語現象の考察・分析に基盤となっており、日本語の現象だけの観察では得られなかったであろう重要な一般化が獲得されてきた。しかし、近年の「述語の意味」「語彙概念構造」「概念意味論」「語形成」などの観点からの研究が日本語の現象を基盤に非常に生産的であることを考えるなら、日本語には [A] 領域の現象が豊かで、理論的にも重要な発展を支えてきていることを示している。そして、本研究では、[C] 領域との関わりで統語構造と操作を考えると、[B] 領域の考察では得られなかった言語についての知見が豊富に得られることを、理論構築と経験的事実によって明らかにした。これにより、冒頭の疑問「日本語とは如何なる言語か」の観点から言えば、日本語は、印欧語と比べ、「命題プロパー」な現象より、「命題前」([A] 領域)の語形成や統語と形態の区別の難しい現象が豊富で、「命題後」([C] 領域)に関わる「主文現象」は「発話の力」の統語的表示に関して他言語からは得られない知見を提示する言語と考えられる。それ故に、[B] 領域中心のこれまでの統語理論では、日本語はその主流となることはできなかったのである。

では、日本語のような「命題プロパー」ではない言語からの理論構築は、どのような「利点」があるのだろうか？「命題」の基本は述語、及びそれと関わる名詞句や前(後)置詞句といった「語彙範疇(内容語)」である。つまり、これまでの理論は大雑把に言えば、語彙範疇の観点から構築された理論と言える。それに対し、「命題の前や後」と関わるのは、語の形成を可能にする「形態素」や素性であり、語用機能の表出として、「疑問」「命令」「提示」などといった語用・情報・談話とかかわる素性である。それらは「語」として表出するのではなく、特定な位置(文頭、文末)を確保したり、語の形態を変えることで統語構造をマークする。そうした「表示」「移動」を可能にしているのは、「機能範疇」と考えられ、日本語のような言語からは

むしろ、「文の命題的意味」からは到達できない「語の構築や文の機能」と関わる「機能範疇」を中心に据えた言語理論の構築が促されることになる。そして、過去半世紀余りを振り返るなら、理論研究は、「内容語」から「機能語」へとシフトしてきているのである。本研究はそうした理論研究の変遷にあって、日本語の現象から経験的にその方向が正しいことを示したことになる。(これについては、以下の業績リストの〔雑誌論文〕⑤、〔図書〕①～③で論じている。)

(2) **日本語の主文現象と理論構築**：上記(1)では、概念的に、本研究の成果としての理論の方向性を示したが、より具体的に、[B]と[C]の接点となるCP領域の構造と機能、操作について、日本語の現象を基盤に提言した。つまり、CP領域にはこれまでの理論で想定していた「補文標示」「疑問文標示」「主題」といった要素以上に、「命令文」「提示文」「断定文(判断文)」など、文の語用的機能を司る情報があることを、様々な「文タイプ」の現象を扱うことで示した。以下①～⑦は、本研究の成果から得られた、新しい知見であり、日本語がCP領域の観点からは、非常に「理論構築に適した言語」であることを示した具体的な成果である。

- ① 主文の文タイプが、空主語の生起、提示文などに見られる前置詞句や助動詞の移動(英語)、動詞の特定な形態(日本語)と連動していることを示し、日本語は、CP領域においては、英語などより、より明確な「一致現象」を示すことを主張。(〔雑誌論文〕の②、⑦、⑩などを参照)
- ② 文中要素の省略には「談話での復元可能性」の観点から、話者や聞き手の省略は「主題」の省略の一種と考えられてきたが、「主題」と「話者・聞き手と関わるモダリティ」の違いを明確にし、日本語に多出する「空範疇」が、「主題」により認可される場合と「話者・聞き手と関わるモダリティ」場合で、統語的振る舞いが異なる。主題は人称的には「3人称」であり、「主題」も持たず、「話者・聞き手と関わるモダリティ」とも関わらないCPは「提示文」として、特有の構造を持ち、判断文特有の時制解釈などを可能にしていること。(〔雑誌論文〕の⑫、⑬、⑭など参照)
- ③ 発話・語用機能が英語などの言語では文頭に表出するが、日本語では、文末で多用されることから、主要部の位置に関わるパラメーターが、CP領域での語用機能の表示に関わることを経験的な証拠を提示して示し、文末の構造からCP構造を構築・検証した。(〔雑誌論文〕の①、⑩、⑬など参照)
- ④ イタリア語などを基盤にしたカートグラフィ研究でのCP構造表示が、日本語の終助詞の現象や、文頭への移動の制限など

に有用であることを示した。(〔雑誌論文〕の③、④、⑥、⑨参照)

- ⑤ 語用機能の扱いなどに関し、本研究の理論的想定・方向とは必ずしも一致していない研究での成果が、大枠で本研究と整合性を示す形で今後考察が可能なことが明らかになった。(これについては、以下(3)にリストしたのシンポジウム等で討議;〔図書〕の①参照)
- ⑥ GB理論までで得られた統語構造と操作に関わる最も重要な知見は、(i)機能範疇も語彙範疇同様、主要部と指定部があり、主要部の素性が指定部への移動や主要部への併合を促すこと、(ii)移動や併合といった統語操作の基本は、「一致」素性の存在と「局所性」を遵守することである。本研究の理論構築においても、Rizziやカートグラフィ研究で提案されたCP領域に複数の主要部を想定し、文タイプと関わる素性(人称、時制解釈素性など)の精緻化するとの方向性で、これまでほとんど顧みられてこなかった日本語の主文現象が記述できることを提示した。つまり、CP領域に統語の基本と操作と広げる必要性を示すことにより、理論構築の方向性を具体的に提言した。(本研究のほとんどの成果で、それを確認。及び、以下の〔図書〕の①～③参照)
- ⑦ 日本語の中立叙述文(例えば:「花子がそこに立っている。」)のような「一見」もともと基本的な命題を示す文が、CP領域の持つ素性と文解釈の観点からは、英語の場所倒置文(例:Into the pond jumped the frog.)のような、ラディカルに構造変換を起こしている構文とCP領域の観点からは、「発話帰納的にも、構造的にも同じ」であることを示し、発話語用領域をも巻き込む形での比較統語論の醍醐味を、様々なケーススタディとなる現象と分析により提示した。(〔雑誌論文〕の⑫参照)

(3) **成果の発表と本研究活動の分野への貢献と波及**：本研究には、「日本語から言語理論へ」という研究の方向性の定着とその生産性を示すという大局的な使命もあった。この方向性は、日本における生成文法研究が長年「理想」とし目指してきたことであり、その流れを決定づけられるなら、分野への貢献と波及は、「具体的な研究の内容」より大きいとも言える。本研究は、そうした「遠大な」目標も抱えていことから、2007年度からの3年間の研究としては、<一応>2010年で収束させるが、その後も継続して、その提案を、英語を含めた他言語により検証を含め、理論を発展させることを今後も継続することを視野に入れており、それが可能な形での、研究協力体制・関係を構築した。それにより、本研究が一過性で終わるのではなく、研究成果の波及が、研究の内容としても、人的交流、人材育成の観点からも長く及ぶことが期待

できる。

本研究では、多くのシンポジウム、ワークショップ、コロキウムを企画・開催してきたが（主な物を以下に記載）、それらに参画して下さった多くの国内外の研究者は「研究協力者」として、今後も密に研究を進めていく体制となっており、これも、本研究「ソフト面」での大きな成果である。（紙幅の都合から、代表的な研究者をリストしたが、これに加え、若手研究者、大学院生など、多くが参画した。詳しくは、ワークショップ等の情報と共に、以下のホームページを参照されたい。）

【本研究の課題をテーマに企画・開催した主な（国際）シンポジウム・ワークショップ】

- 言語学ワークショップ『語用機能と統語論』（2007年9月3日）神田外語学院
- 理論言語学ワークショップ（2007年10月20日）東京国際フォーラム。
- 言語学国際シンポジウム『統語構造と機能範疇』（2007年10月21日），東京国際フォーラム。
- 言語学ワークショップ『日本語学と理論言語学：文の語用的機能を視野に入れて』（2008年1月26日）神田外語学院。
- 理論言語学・日本語学ワークショップ『統語構造と文の機能（Force）：項構造・命題を超えて』（2008年7月26・27日）神田外語学院。
- 公開シンポジウム「文の周縁部の構造と日本語」日本言語学会第138回大会（2009年6月21日）神田外語大学。
- 理論言語学ワークショップ『日本語の統語研究の新展開：命題を超えて』（2009年9月3日）神田外語学院。

【研究協力者】（上記イベントなどでの発表・講師 and/or 1 本研究の成果としての以下の「図書（論文集）」への寄稿、など）敬称略

【海外協力者】Guglielmo Cinque（ベニス大学）、Liliane Haegeman（アントワープ大学）、Horvath Julia（テルアビブ大学）、北川善久（インディアナ大学）、木津弥佳（ロンドン大学）、宮川繁（MIT）、Luigi Rizzi（シエナ大学）、田中秀和（ヨーク大学）、富岡諭（デラウェア大学）、他。

【国内協力者】阿部潤（東北学院大学）、青柳宏（南山大学）、有田節子（大阪樟蔭女子大学）、長谷部郁子（筑波大学非常勤）、益岡隆志（神戸市外国語大学）、森山卓郎（京都教育大学）、野田尚史（大阪府立大学）、奥聡（北海道大学）、佐野まさき（立命館大学）、上田由紀子（秋田大学）、内堀朝子（日本大学）山田昌史（島根県立大学）、他。

【神田外語大学学内協力者】井上和子（名誉教授）、石居康男、栗原和生；神谷昇、藤巻一真、上原由美子、真鍋雅子、他。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

（なお、論文集（図書）に掲載された論文は、〔雑誌論文〕として掲載してある。）

〔雑誌論文〕（計 20 件）

- ① 長谷川信子、「文の機能と統語構造：日本語統語研究からの貢献」（査読無）長谷川信子（編）『統語論の新展開と日本語研究：命題を超えて』開拓社、2010、1-30。（入稿済）
- ② 長谷川信子、「CP領域における空主語の認可」（査読無）長谷川信子（編）『統語論の新展開と日本語研究：命題を超えて』開拓社、2010、31-65。（入稿済）
- ③ 遠藤喜雄、「終助詞のカートグラフィー」（査読無）長谷川信子（編）『統語論の新展開と日本語研究：命題を超えて』開拓社、2010、67-94。（入稿済）
- ④ 遠藤喜雄、「話し手と聞き手のカートグラフィー」（査読有）『言語研究』（日本言語学会学会誌）136巻2号、2009、93-120。
- ⑤ 長谷川信子、「生成文法理論日本語（特集：言語理論と日本語）」（査読無：悠遠）『日本語学』（明治書院）4月号、2009、4-13。
- ⑥ 遠藤喜雄、「トピックのカートグラフィー」（査読無：悠遠）『日本語学』（明治書院）4月号、2009、50-59。
- ⑦ Hasegawa, Nobuko, “Agreement at the CP Level: Clause Types and the ‘Person’ Restriction on the Subject,”（査読有）*The proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics*, No. 5. (MITWPL), 2009, 313 – 152.
- ⑧ 長谷川信子、「直接受動文と所有受動文：little-*v*としての「られ」とその素性」（査読有）由本陽子・岸本秀樹（編）『語彙の意味と文法』くろしお出版、2009、433-454。
- ⑨ 遠藤喜雄、「(Anti-)Symmetry in syntax: A case Study of adverbial clauses」（査読有）*Scientific Approaches to Language*（神田外語大学言語科学研究センター紀要）No. 8, 2009, 1-26.
- ⑩ Hasegawa, Nobuko, “Wh-Movement in Japanese: Matrix Sluicing is different from Embedded Sluicing,”（査読有）*The proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics*, No. 4. (MITWPL), 2008, 63-74.
- ⑪ Hasegawa, Nobuko, “Licensing a Null Subject at CP: Imperatives, the 1st Person, and PRO,”（査読有）*Scientific Approaches to Language*（神田外語大学言語科学研究センター紀要）No. 7, 1-34.
- ⑫ 長谷川信子、「提示文としての中立叙述文」（査読無）金子義明・菊地朗・高橋大厚・島越郎（編）『言語研究の現在：形式と意味

のインターフェース』開拓社、2008、62-80.

- ⑬ 長谷川信子、「日本語の主文現象から見た統語論：文の語用機能との接点を探る」(査読無)長谷川信子(編)『日本語の主文現象』ひつじ書房、2007、1-21.
- ⑭ 長谷川信子、「1人称の省略：モダリティとクレル」(査読無)長谷川信子(編)『日本語の主文現象』ひつじ書房、2007、331-369.

[学会発表] (計 24 件)

- ① Hasegawa, Nobuko. “Subject Agreement and Clause Types,” *Annual Meeting of the Association of Asian Studies*, 2010 年 3 月 26 日, Philadelphia Downtown Marriot, (米国).
- ② Hasegawa, Nobuko. “Licensing a Null Subject: Agreement in the CP Domain,” at *the Seminar in Topics in East Asian Linguistics*, 2009 年 11 月 24 日, Harvard University/MIT (米国)
- ③ 長谷川信子、「文タイプ (Force) と人称制限」日本言語学会 第 138 回大会 公開シンポジウム、2009 年 6 月 21 日、神田外語大学.
- ④ 遠藤喜雄、「主語のカートグラフィー」日本言語学会 第 138 回大会 公開シンポジウム、2009 年 6 月 21 日、神田外語大学.
- ⑤ 遠藤喜雄、「主文と従属文のカートグラフィー」日本英文学会、2009 年 5 月 31 日、東京大学:駒場キャンパス.
- ⑥ Endo, Yoshio. “Critical Freezing Effects in Case Conversion,” *Research Seminar*, University of Geneva. (スイス).
- ⑦ 長谷川信子、「CP 構造からみた主語と一致現象」(シンポジウム『談話と統語のインターフェイス』) 日本英語学会第 26 回大会、2008 年 11 月 16 日、筑波大学.
- ⑧ 遠藤喜雄、「統語構造地図作製プロジェクトにおける談話情報」(シンポジウム『談話と統語のインターフェイス』) 日本英語学会第 26 回大会、2008 年 11 月 16 日、筑波大学.
- ⑨ Hasegawa, Nobuko. “Agreement at the CP Level: Clause Types and ‘Person’ Restriction on the Subject,” *The Fifth Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL)*, 2008 年 5 月 24 日, University of London (イギリス).
- ⑩ Hasegawa, Nobuko, “The Main Clause CP System and ‘Person’ Restrictions,” at *the International Symposium on Syntactic Structure and Functional Categories*, Graduate School of Language Sciences, Kanda University of International Studies, 2007 年 10 月 21 日, 東京国際フォーラム.
- ⑪ Hasegawa, Nobuko, “Agreement and

Modality: Licensing a Null Subject at CP,” at *the Workshop on Theoretical Linguistics*, CLS, Kanda University of International Studies, 2007 年 10 月 20 日, 東京国際フォーラム.

[図書] (計 3 件)

(編著書)

- ① 長谷川信子 (編著)、開拓社『統語論の新展開と日本語研究：命題を超えて』2010 秋刊行予定 (入稿済み) 総ページ数：約 380 頁.
- ② 長谷川信子 (編著)、神田外語大学『「文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言(1)」平成 19 年～21 年度科学研究費補助金 (基盤研究(B)研究報告書)』(言語科学研究センター紀要・別冊) 2 008、総ページ数：345.
- ③ 長谷川信子 (編著)、ひつじ書房『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』2007 年、総ページ数：xvi +379.

[その他]

ホームページ等

- 神田外語大学・言語科学研究センター (センター長：長谷川信子) ホームページ
<http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/lab0/>
(本研究課題と関わるワークショップやコロキウム (上記「4.-(3)」参照) の情報、本研究成果の一部を記載された報告書や紀要の配布申込)
- 代表者の長谷川信子の個人ホームページ
<http://homepage3.nifty.com/nhasegawa/>
(長谷川の執筆した論文が pdf でダウンロード可能な形で搭載)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川 信子 (HASEGAWA NOBUKO)
神田外語大学・言語科学研究科・教授
神田外語大学・言語科学研究センター・
センター長
研究者番号：20208490

(2) 研究分担者

遠藤 喜雄 (ENDO YOSHIO)
神田外語大学・言語科学研究科・教授
研究者番号：50203675
(2008 年度より分担者)